

「洗礼者ヨハネとイエス」（ルカ七章一八〜三五節）

1 洗礼者ヨハネの問い

洗礼者（バプテスマの）ヨハネ。ご承知のように、イエス・キリストが宣べ伝えられるところ、どこでも彼も語られる、イエスの宣教の道ぞなえをした、旧約聖書最後の預言者です。

ルカによる福音書では、第一章で、彼の誕生のしだいが詳しく語られます。第三章では彼の活動が、イエスの宣教に先立って、ヨルダン川の低地、荒野で、独特の宣教活動を始めたこと、悔い改めの洗礼を受けようとユダヤ全土からいるんな階層の人が押し寄せてきたことなど、伝えられています。「洗礼者」というのは洗礼を授ける人という意味です。一種のあだ名だったのでしようけれど、ほとんど彼の正式の呼び名になったのです。今日の箇所までで最後にヨハネの名が出て来たのは、やはり第三章でした。そこにこう書いてありました。

ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。・・・（三・一八〜二〇）。

ですからヨハネはいま獄中にいます。このあと間もなくして彼は首をはねられることとなります（九・九）今日の箇所が伝えている話は、ヨハネが殺される少し前のことです。

さてこれもご承知のようにヨハネとイエスの関係は、いわば生まれる前からのものでした。母親同士、姻戚関係にありました。ヨハネの母はエリサベト、イエスの母はもちろんマリア、年齢は少し違うようですが、よく知っていた。マリアの受胎が天使から知らされたとき、エリサベツも、年をとってはいるものの妊娠していることを聞かされ、マリアが急いでユダの山里にエリサベツを訪ねたことが、一章に書いてあります。画題としても取り上げられる美しい場面です。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、胎内の子、すなわち洗礼者ヨハネが「喜んでおどった」とあります。関係の深さを物語っています。

三十歳のイエスが、メシアとしての自覚をいよいよ深め、神の国の宣教に入っていくとき、ヨハネから洗礼を受けたことは、これもみなさんよくご承知のことです。そのころ、この洗礼者ヨハネだけでなく（ヨハネは個人で活動していたわけですが）も）、ヨハネのような考えをもって活動していた集団（教団）が、少なくともかつて時代です。しかしイエスは、洗礼者ヨハネとの関わりを、聖書にありませんが、ずっともっていたと考えてよいと思います。ヨハネの弟子ではなかったものの、ヨハネの働きは注目すべきものとして見守っていたのです。そうでなければ、今日の箇所でも群衆に向かって、洗礼者ヨハネについて、「およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない」（二八節）というはずはありません。イエスが自らの人生の使

命を深く考えていく上で、つまり、メシアとしての歩みに入ろうとする中で、ヨハネは先駆者でした、もつといえ、まさに師でもあったのです。その師ヨハネからイエスは洗礼を受けたのです。

こう考えてくると、今日の箇所のはじめのところで、ヨハネが獄中から二人の弟子を遣わして、「来るべき方は、あなたでしようか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と問わせたのは（「来るべき方」というのはメシアのこと）、イエスがメシアであることをヨハネは疑って、最後の最後、分からなくなつて、問わせたというようなことではないのです。イエスがメシアであることを、むしろヨハネ自身の弟子たちにも、自分の終わりが近いことを予感しつつ、知らせようとした、そのため問わせたようにも思われます。

2 イエスの答え

さてヨハネの問いに対するイエスの答えを見てみましょう。

そのとき、イエスは病氣や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。それで、二人にこうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである」（二一〜二三）。

イエス自身がここで語っていることは、これまで福音書で私どもが見てきた通りです。イエスは教え、そしていやし、人々を助けていました。

もちろんここにかけてある全部をすでに聞いている、読んでいるというわけではありません。例えば一番最初に語られている、「目の見えない人は見え」など、私どもは、一八章を、またなければなりません。しかしイエスが病氣や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやしていたことの中に、盲人を見えるようにすることも含まれていないことはありません。

ところでこうした出来事は、とくに死人のよみがえりなどは、イエスラエルの民が歴史の終わりに、神の全き支配の実現したときに、神の国がなったときのこととして期待していたことです。そのようなものとしてイザヤ書などが、随所で、予告、預言していたものです（二六・一九、三五・五、四二・七、六一・一他）。それが現実となったことは、先週私ども、やもめの一人息子の生き返りによって聞いていたところ（七・一一〜一七）。イエスはヨハネの問いに対してわたしがそうだとか、そうでないだとか答えることをしませんでした。世の終わりの出来事が、いま、ここで起こっている、「神の国」（二八節）がここに来ていふこと、それを自らメシアであることの証しとして示したのです。

イエスの答えは、命の危機が迫っているヨハネにとって、何と慰めに満ちた神の答えであったことか、思わざるをえません。

この答えの終わりでイエスが語っていること、貧しい人が福音を告げ知らされてい

るそのことが神の国の来ていることのしるしだというのは、私どもには慰めに満ちたことです。平地の説教が、「貧しい人々は幸いである、神の国はあなたがたのものである」という祝福から始まっていたことも思い起こします(六・二〇)。貧しい人々とは、そのとき見たように、お金に困っている人だけのことではありません。差別され、社会の周縁に追いやられている人々、それゆえ神にのみ望みを託している人々のことです。そのような者として私どもも、イエスの福音に耳を傾けている、そこに神の国は来ているのです。

もちろんそれは、確かなものだとはいえ、まだ神の国の一つのしるし、証しであるにすぎません。神の国を、神の支配をおびやかすものが、すべてなくなつたというのではありません。ということは、神の国のこの確かなしるし、確かな証しの中に約束が含まれているということです。地上的・人間的なすべての制約を超えてやがてそれは現実のものとなるという約束、それは希望を私どもにもたらすのです。神の国の現在に生きることは、そのまま神の国の希望に生きることです。

イエスは「ほかの方を待たねばならないのか」と問われて、これから現われるだけか他の人を挙げることをしませんでした。イエスにおいて神の支配が来ているのですから、どうしてそんなことができるでしょうか。じつさい、イスラエルの歴史の中に登場した偉大な神の人々、モーセにしても、エリヤにしても、ダビデにしても「別の者」を指し示した。洗礼者ヨハネも「来るべき方」を指し示した。洗礼者ヨハネは来るべき方を指し示す人でした。イエスの答えの決定的点は、イエスが自分以外のものを指し示さなかつたことです。

ところで「わたしにつまづかない人は幸いである」とイエスは答えの最後で語っています。これは、洗礼者ヨハネを念頭において言っているのではないと思います。先ほどから引き合いに出しているルカ第三章に、民衆がヨハネをメシアではないかとみな心の中で考えていたという一節があります(三・一五)。人々がメシアをもしヨハネのように、悔い改めを迫る、裁きを語るものと受けとっているなら、それは間違いです。メシアとは救い主です。裁きではなく解放を、裁きではなく赦しをもたらす方です。私どももまた、これを誤解してはならないのです。

3 知恵の子らによって

はじめに少し申し上げたように、洗礼者ヨハネのことは、この福音書のはじめから語られていたことでした。しかし今日の箇所を最後に福音書に出て来ません。出て来ても、名前だけ、それ以上ではありません。

洗礼者ヨハネ、彼はイエスの先駆者です。彼を否定することは、イエスを否定することであり、それは、旧約聖書に始まり、イエス・キリストにおいて頂点をもち、成就する神の救いの歴史を否定することです、ヨハネを位置づけることは、イエスを正しく知り、神の救済の業にあずかることです。

それゆえヨハネの使いが帰つてあとイエスが群衆に、イスラエルのその民に語つたのは、ヨハネの偉大さであり、ヨハネをどのように受けとめるかは、そのままメシアであるイエスをどのように受けとめるかである、それと直結する問題だということでした。

今日の箇所の後半（二四節以下）から二つのことを申し上げたいと思います。一つはヨハネの偉大さです。それはすでに申し上げました。彼は預言者、いな預言者以上の者です。

もう一つは、ヨハネの偉大さも、したがってイエスの救いの働きも、この世にすなおに受け入れられるものではないということです。イエスはそれを一つのたとえで語っています。

では、今の時代の人たちは何にたとえたらよいか。彼らは何に似ているか。広場に座って、互いに呼びかけ、こう言っている子供たちに似ている。「笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、泣いてくれなかった」（三一～三二）。

これは当時の子供の遊び、掛け合い言葉の遊びから取られたものようです。婚礼ごっこ、葬式ごっこです。子供が二手に分かれ、一方が、「笛を吹いたのに」というとも、もう一方が「踊ってくれなかった」と応じる。「葬式の歌をうたったのに」というと「泣いてくれなかった」と返すというわけです。私もよく分らないところがあります。その意味は、人々が、ヨハネも、イエスも、自分たちの要求に沿った振る舞いをしていないと非難しているのです。

そうした非難は、ヨハネに対しては、悪霊に取り憑かれているといい、イエスに至っては「大食漢で大酒飲み」「徴税人や罪人の仲間」との悪口、のしりまでエスカレートしています。ただしイエスが「徴税人や罪人の仲間」であるということはまさに正しい認識ですけれど。

このようにヨハネもイエスも、神の救いの働きは、この世の子ら、時代の子にとつて、当時も、そしていまも、決して簡単には受け入れられるものではないのです。そこに無理解があり、軋轢があります。

そうした中で今日の箇所の最後の言葉は、私どもにとって本当に慰めと励ましに満ちた言葉です。「知恵の正しさは、それに従うすべての人によって証明される」（三五節）。別な訳、たとえば、ルター訳は、知恵は知恵の子らによって正しいとされている、となります。

「知恵」とは、旧約聖書以来、まさに神に由来する知恵として重要な意味をもった言葉です。しかしここでは端的にイエス・キリストととってよいと思います（Iコリント一・三〇）。神が私ども人間を、罪人を、イエスによって救おうとしておられること、これこそが神の知恵です。

この神の知恵の正しさを知っているのはだれでしょうか。それは洗礼者ヨハネを受け入れた徴税人や罪人です（二九、三四節）。それはまた私ども、赦された罪人の群れである教会です。

神の深い知恵、神の知恵の正しさは、「知恵の子ら」、すなわち、教会によって受けとめられて証明されるのです。その正しさは客観的にあるというより、私どもの信仰と服従によって証しされていく、証しされていかなければならない。このことを今日は心にとめたいと思います。